花園学園理事・評議員会

社会の要請に応えよ

河野総長　臨床宗教師に期待

臨済宗妙心寺派を経営母体とする花園学園の理事・評議員会が5月31日、京都市中京区の花園大で開かれた。初代の大学「総長」に就任した河野太通・前妙心寺派管長が出席。宗教者として社会の要請に応える重要性を強調し、同大が来年度設置する予定の「臨床宗教師」養成講座への期待を語った。

総長は建学の精神の象徴で、学園理事会、評議員会には属していない。この日は来年の文学部改編、2年後の教育学部新設計画の報告があり、河野総長は自らの意向で特別に臨席。議事に先立ち理事・評議員や傍聴の大学職員に挨拶した。

河野総長は、かつて鈴木大拙氏が「僧侶は現代社会思想を学び、海外で仏教を伝えるため英語を身に付ける必要がある」と説いたことや、時代に先駆けた問題意識のもと花園大が仏教福祉学科を創設した経緯に触れ、そのような見識が現在、十分に生かされているかどうかを問い掛けた。

さらに、仏教の慈悲を社会に展開する道を教団も仏教学者も示し得ていないと中村元氏が批判したことを挙げ、「今ほど宗教的社会奉仕が求められている時代はない。臨床宗教師のような人材養成は花園大が率先して取り組むべき課題ではなかったか」と力説。

今日的課題に取り組める人材育成を、理事会として大学に強く働き掛けてほしいと要望した。

この後、学長直属の大学改革・IR推進室から、2017年度の文学部改編、留学生別科（1～1年半コース）開設準備の進捗状況、18年度新設計画の教育学部のコンセプト等について報告が行われた。

臨床宗教師養成講座については、開設記念シンポジウムを検討中。教育学部では、教育現場での活動を支える意志・価値観を養う禅の精神を重視、留学生別科でも禅の教育を「他校との差別化」の柱の一つと位置付ける方針が提示された。

（津村恵史）